

令和7年度 山形県農業・農村政策審議会 会議録（概要）

日 時：令和8年2月13日（金）13:30～15:30

会 場：山形県建設会館 1階大会議室

●会長の互選

委員互選の結果、村山委員を会長に選任した。

●審議事項

- 1 農業及び農村の動向等に関する年次報告案について
- 2 2025年農林業センサスの調査結果（概数値）について
- 3 令和6年農業産出額について

●審議経過

- 1 事務局から説明し、全員異議なく承認
- 2 事務局から説明し、各委員から県の施策等に対する意見を聴取
- 3 同上

主な意見は下記のとおり

<各委員の意見要旨> ※発言順

【吉原委員】

農業従事者数は年々減少が進んでおり、限られた人材をいかに活用していくのかが、これからのテーマになってくると思う。

大蔵村でJAの選果場を視察した際、ロボットがパック詰めをしていた。それにより、効率が上がるだけでなく、生産者はパック詰めという作業に煩わされずに栽培や技術を磨くことに専念できるとのことであった。生産性の向上は、今後ますます重要になってくると考えるため、県には是非支援をお願いしたい。

米価が上がり、生産者の方々の経営意欲が高まったことはいいことだと思う。今後、米価がどうなるかは分からないところではあるが、生産者の経営意欲が高まっているときに、県には設備の更新など安定生産に向けた支援を期待したい。

【明石委員】

県内での販路開拓のため、農家個人がSNS等を活用して発信しても「中々注文が来ない」といった話を聞くことがある。個人での発信には限界があるので、県が、意欲ある農家と消費者を結びつけるようなポータルサイトの作成や、インフルエンサーとのマッチングの仕組みづくりを行うなど、農家を支援していただければと思う。そうした取り組みを行うことで、山形県が、今後さらに新規就農しやすい環境になるのではないかと。

マメコバチなどの生物資源の管理について、個人の経験に頼るのではなく、スマート技術を活用できないものかと考えている、AIの画像分析など様々な技術があると思う

ので、持続可能な農業の実現に向けて検討いただきたい。

【浅野目委員】

さくらんぼの減収への対応として、ミツバチの追加導入の支援があるが、追加でミツバチを注文するにも、元々ミツバチが足りない状況。マメコバチは、毎年増やそうと努力はしているが、なかなか上手く増やすことができない状況。県外からのミツバチの導入にも限界があり、ハチを増やすのが一番有効。例えば、県内に養蜂家を誘致したり、県内で活動してくれる方々を増やしたり、マメコバチを繁殖させるだけの会社を増やせたらいいのではないかと。また、県内に優先的に提供してくれるハチ農家さんがいたらいい。

県から様々な支援をしてもらっているが、資材など経費がかかるものが多すぎ、果樹農家のモチベーションはかなり下がっている気がする。農家のモチベーションが上がるような支援策を期待している。

【押野委員】

本県の新規就農者は増えてきているが、どのようにサポートをしていったらいいのかわからない案が浮かばずにいる。地域の中で様々な問題を相談してもらい、少しでも定着してもらえるよう努力しているところである。

会社で活用している、県のリモートセンシングのデータは、使いやすく、他県と比べても、山形県の衛星データは飛び抜けて進んでいる。担い手不足や後継者不足、人手不足といった中で、こうしたスマート農業の進展に大いに期待している。

様々なバリエーションの農業経営者が増えている中で、行政が、全員にマッチするような施策を行うことは難しくなっている。多岐にわたる農業経営者に対し、少しでもサポートしてもらいたい。

【坂井委員】

農業を生業（なりわい）とする際に、農業スタイルが自分に合っているかが非常に重要である。スマート農業をやっていくスタイルもあると思うが、自分は田んぼに入って泥んこになって農業をやるスタイルが好きである。こうした農業スタイルを大事にしている農家がいるということも忘れないでほしい。

最低賃金が上がっている中、賃金を支払っていくのが大変になってきている。賃金に対する支援策等を考えてもらえたらありがたい。

一昨年、外国人材の活用促進として、カンボジアから2人の方が来て就労してもらった。熱心に働いてくれただけでなく、楽しそうに働いてくれて自分達のモチベーションを上げてくれた。県からの助成があり、来てもらうことができたが、助成がなければ受け入れられない金額だった。人材派遣であるため、間に派遣業者が入ってこのような金額になってしまうということは理解しているが、何か新しいシステムづくりができればとても有効に使える制度になるのではないかと考えている。

【佐藤委員】

自分の地域では、農村RMOの形成を目指し、農地の保全や生活支援の活動などに東北公益文科大学の学生たちと一緒にいる。高齢化や過疎化が進んでいる中であっても、持続可能な地域を作れるよう取り組んでいるところである、こうした中、国や県では補助金や交付金などの様々な支援制度があるが、中々活用しきれていない現状にある。補助金等の支援制度の情報について、共有や周知を今後もお願いしたい。

自分は米主体で農業をしている。米価が上がったことで、自分の周りには、辞めようと思っていた年配の農家で継続した者もいる。今後、米価が下がったときに、そうした年配の農家が一気に辞めてしまうのではないかという不安がある。

【八鍬委員】

やまがたフルーツ150周年の取組みは、幅広い連携やPRにつながるいい機会になった。生産者ではなくとも応援できて良かった。

担い手の確保にあたっては、新規就農者や若手農業者の育成がこれからも大事である。また、親元就農、雇用就農、女性、年齢などを問わず、多様な人たちが活躍できる環境整備がとても重要である。技術の習得や経営指導など、継続的な支援をお願いしたい。

新規で農業を始める方が、初めから独立は不安だという場合でも、農業に挑戦しやすいよう、雇用の助成や、研修の支援などを充実させることを強くお願いしたい。

生産性の向上にあたっては、経営面積が拡大すると効率的な経営が求められるので、農地の集積の推進や、圃場の整備、スマート農業の導入支援などを引き続きお願いしたい。

【矢萩委員】

果樹農家が規模を縮小する場合、借り手がいないと樹を切ってしまう。移動できるのであれば移動してどこかで栽培できないかと思っている。苗木から育てるのではなく、移動できるものを活用するための移植の支援などがあればいい。

やまがたフルーツ150周年の取組みはよかったと思うが、他県でも青森県など150周年の取組みを行っている。自分は、151年目が大事だと思っている。他県がやらない、そうした取組みが必要なのではないか。

地域計画、農業委員会、農地バンクの手続きがバラバラだと感じており、ワンストップで調整できないものかと思っている。

害鳥駆除や防犯、さくらんぼの人工授粉等でドローンの更なる活用を検討してほしい。地域計画は、絵に描いた餅にならないようブラッシュアップする必要がある。

【松田委員】

本県の令和6年生産農業所得が、全国第11位で、東北第2位となっていることに関心を持った。このデータに、1人当たり所得の数字などを盛り込むことで、農家は頑張れ

ば十分に暮らしていけるということをアピールできるのではないか。また、若者にアピールできるような数字などを出すことで、担い手不足の解消につながり、もっと明るい山形の農業が築けると思う。

林業の就業者の高齢化率は、全産業平均よりは高いが、39歳以下の割合は、近年増加傾向にある。若年層の割合が増えている理由を分析できれば面白い。

【和田委員】

今年に入って漁師が船で漁に出たのが、1月は1日半、2月は今日時点で2回と、働きたくても働けないのが実態。天候が不安定で、肝心の魚が獲れず。漁師の経営状態は非常に厳しい状況である。1週間や2週間、時化で漁に出られなくても問題ないよう、生簀作りが急がれる。新たな水産業の転換に向けて、安定供給できる環境整備に力を入れてほしい。また、トップセールスで海産物をアピールしてほしい。

漁業も高齢化が進んでおり、就業者が中々いない状況。そうした中、水産高校の役割は重要であり、水産高校の子どもたちに魅力ある漁業を伝えていくことが大事である。

<会議の総括>

【村山会長】

農業を考えた場合、気候変動の影響が大きく、その対応がまず必要である。また、山形県の農業においては、土地の集積・集約化が必須。一方で、すべてを大規模化する必要はなく、様々な形態で農業に取り組んでいただくことも大事である。60歳以上の農家の方は、いい笑顔で働いており、農業はすばらしい職業だと思っている。こうした点をクローズアップしていくことが必要なのではないか。「魅力ある農業」ということをキーワードに、農業をやっていただける方を増やしていくのが大事である。